

「現代フェミニズム理論」の見取り図を呈示

大変まじめな手堅い本

吉澤夏子

有賀美和子著

►現代フェミニズム理論の地平

ジェンダー関係・公正・差異

1・5刊 四六判230頁 本体2200円

新曜社

大変まじめな手堅い本である。欧米の論者の文献を丁寧に読みそれを手際よく紹介し、文字通り「現代フェミニズム理論の地平」が過不足なく見渡せるようになっている。まず目次に沿って全体の流れを確認し内容を紹介する。

第一章 「女性学の歴史とフェミニズム理論の変遷」では、女性学の歴史を、七〇年代半ばと八〇年前半で三つの時期に分けている。既存の伝統的な各学問分野における女性の「不可視性」に光をあてた第一期、「差異」派(フェミニズムの興隆とリベラル派／ラディカル派／マルクス主義派／エミニスト／ピック・スリード)による議論が拮抗する。

第二期、三大理論によるフェミニズムの類別化の克服が課題となり、女性の非・ステレオタイプ化と脱・西洋中心主義の議論が台頭する第三期である。第二章「フェミニズム理論の基本的視座」では主としてJ・ブラックスのジェンダーティー論が紹介される。近代合理主義的認識に内在化された「フェミニズム理論の新しい動向と今後の展望」では、「内

少する傾向にある、といつことうが明らかにされる。第六章「フェミニズム理論の新しい動向」として提えた「内なる差異」すなわち女性の多様性への関心の高まりを「新自然」という二項対立的な知能性がある。この分析は「他者を抑圧する差異」を隠蔽する可能性があるので、差異そのものではなく、その差異を抑圧する人間を社会における「関係性」の中で問題化する、という二項対立的な知識である。第三章

著者の力点は、ジェンダー

分析的な力「ゴリー」として「女性の経済的依存性」の概念化と分析に依拠し、ケア労働という女生の主本的な経験は道德的な義務を伴う経験であって単なる経済的な取引ではない、という主張がなされる。

第四章「ロールズの『正義論』とフェミニズム」では、前章の問題提起を受けて、女性を、ケア労働の女性への特化という選択肢から解放し、男女が等しく道徳的な義務を担うような社会的・政治的・経済的諸過程を求めるジェンダーティー論の観点が必要である、という課題に迫るべく、ロールズの「正義論」の考察を通じてジェンダー関係を含む広義の社会正義のあり方が模索される。第五章「性差研究の変遷と近年の動向」では、フェミニスト心理学によって呈示された新しい性差研究である「メタ分析」(研究結果の量的蓄積を用いて性差における種々のパターンに関する精査を行なうもの)の成果が紹介され、全体的に、性差が減

少する傾向にある、といつことある。そこで「女性の多様性と差異性を、人間との二項対立的な知能性がある。この分析は「他者を抑圧する差異」を隠蔽する可能性があるので、差異そのものではなく、その差異を抑圧する人間を社会における「関係性」の中で問題化する、という二項対立的な知識である。第三章

著者の力点は、ジェンダーティー論がもつとも期待して読んだのは第四章である。著者は、ロールズの正義論を「他人への平等な分配」という評者がもっとも期待して読んだのは第四章である。著者は、ロールズの正義論を「他人への平等な分配」という評価に値するものであると論じている。彼の議論の展開においては、それがフローリーの「正義原理を説明する」と繰り返し強調している。その点が少し残念だった。

本書はその「現代フェミニズム理論」の見取り図をすつさまで著者がその課題についてどのように考へ自らの論述をしていくか、どういったように「公的領域・私的領域」という二分法を前提として用いていくか、どういった視点で著者自身がその課題についてどのように考へ自らの論述をしていくか、どういった視点で著者自身がその課題についてどのように考へ自らの論述をしていくか、

(日本女子大学人間社会学部 助教授・社会学)